平成24年度

宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国　　語

注　　意

1　監督者の「始め」の合図があるまでは，開いてはいけません。

2　試験時間は，板書されている時間割のとおりの50分間です。

3　問題数は大きな問題が5問で，表紙を除いて10ページです。

4　解答用紙は1枚で，答え方はマークシート方式です。

5　監督者の指示にしたがって，試験開始前に受験番号と氏名を解答用紙のきめられた欄に書き，さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。

6　答えは，解答用紙に記載されている〔解答マーク記入上の注意〕，および試験開始前に行われたマークシート練習プリントにしたがって，ていねいにマークしなさい。

7　試験中に質問があれば，手をあげて監督者に聞きなさい。

8　監督者の「やめ」の合図があったら，すぐやめて，鉛筆をおきなさい。

一

次のそれぞれの問いに答えよ。

問一 次の――線のカタカナにあてはまる漢字を、それぞれ［　］の中から選べ。

(1) 望遠レンズのショウ点を合わせる。
［ア 衝　イ 象　ウ 照　エ 焦］

(2) 容疑者が身柄をコウ束された。
［ア 貢　イ 抗　ウ 拘　エ 公］

(3) 外国と通商条約をテイ結する。
［ア 定　イ 廷　ウ 締　エ 停］

(4) 早寝早起きをレイ行しよう。
［ア 励　イ 例　ウ 礼　エ 麗］

問二 「衰」の部首はどれか。

ア 口　イ 衣　ウ 一　エ 亠

問三 次のことわざと反対の意味を持つものはどれか。

虎穴（こけつ）に入らずんば虎子（こじ）を得ず

ア 百聞は一見にしかず　イ 寝耳に水
ウ 猫に小判　エ 君子危うきに近よらず

二

次のそれぞれの問いに答えよ。

問一 次の例文のからと意味・用法が同じものはどれか。

今夜は涼しいからよく眠れそうだ。

ア 弟は勉強を済ませてから遊びに出かけた。
イ 彼女は人柄（ひとがら）がいいからだれにでも好かれる。
ウ チーズは牛乳からできている。
エ 暖かな地方から桜の開花の便りが届き始めた。

問二 次の文の中で、重文はどれか。

ア 幼いころの私は、遊園地が大好きだった。
イ 空には雲が広がって、海には高波が立った。
ウ 遠くに車が見えたら、注意しなさい。
エ 街並みが見渡せる高台は、気持ちがよい。

問三 次の例文の――線の動詞の活用の種類はどれか。

今日試合に負けると、優勝は絶望的だ。

ア カ行五段活用　イ カ行変格活用
ウ カ行上一段活用　エ カ行下一段活用

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔、(a)むくつけき女ありて、まま子ののどを十日程ほしてより、飯を一椀みせびらかしていふやう、「これを①あの石地蔵の食べたらんには、汝にもとらせん」とあるに、まま子は(b)ひだるさたへがたく、石仏の袖にすがりて、②しかじかねがひけるに、ふしぎやな、石仏大口あけてむしむし喰ひたまふに、さすがのまま母の［A］もぽつきり折れて、それより［B］とへだてなくはぐくみけるとなん。その地蔵ぼさつ今にありて、折々の供へ物たえざりけり。

ぼた餅や藪の仏も春の風　（注）一茶

（「おらが春」から）

（注）一茶＝江戸時代の俳人である小林一茶

問一 (a)むくつけき、(b)ひだるさたへがたくの本文中での意味は、それぞれどれか。

(1) (a)むくつけき

ア おそろしい　**イ** 無風流な　**ウ** だらしない　**エ** 不作法な

(2) (b)ひだるさたへがたく

ア 怒りをおさえきれず　**イ** 痛みに耐えられず　**ウ** 空腹をこらえられず　**エ** 意地悪に我慢できず

問二 ①あの石地蔵の食べたらんには、汝にもとらせんの意味として適当なものはどれか。

ア あの石地蔵が食べたら、お前にも食べさせてやろう
イ あの石地蔵が食べるなら、お前にも分けてくれるはずだ
ウ あの石地蔵が食べなかったら、お前に与えてもよいだろう
エ あの石地蔵が食べるのだから、お前には食べさせられない

問三 ②しかじかねがひけるとあるが、この時「まま子」が願った内容として最も適当なものはどれか。

ア 「石地蔵」が、「供へ物」を食べさせてくれること
イ 「石地蔵」が、差し出した飯を食べてくれること
ウ 「まま母」の悪行が、世間にあきらかになること
エ 「まま母」が、昔と同じようにやさしくなること

問四 ［A］・［B］に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア ［A 骨　B ま子］
イ ［A 腰　B 我が夫］
ウ ［A 心　B 地蔵ぼさつ］
エ ［A 角　B 我うめる子］

問五 「一茶」の句で使われている表現技法はどれか。

ア 倒置法　**イ** 擬人法　**ウ** 切れ字　**エ** 字余り

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

多くの動物には正中線[注1]というのがあって、この線を軸として左右が対称なのが普通であると、われわれは認識することが多い。でも、動物の中には必ずしも左右対称でないものもある。（　a　）巻貝がそうである。まったく不定形の動物もいて、イソカイメン（磯海綿）がそうである。またヒトデやウニのように中心点から放射状に相称形[注2]の動物もいる。さらには基本的には左右相称であるが、何らかの理由で身体の一部が左右［　A　］の動物がいる。たとえば、シオマネキ（蟹）やテッポウエビは片方の鋏（正確には鉗脚）が異常に大きい。

人間をも含む脊椎動物は基本的に正中線を持ち、左右対称であるのが普通である。でもフクロウ類の耳は、実は左右［　B　］なのである。外見は羽毛で覆われているので一見対称に見えるが、その羽毛をわけて見ると、①耳孔とその周囲の形は著しく異なっている。

鍛冶屋さん[注3]の利き腕、プロ野球の投手の利き腕はいずれも反対側の腕より、長く、大きく、太くなっているもので、これは多年にわたってその腕を強力に用いる②余儀無さからそうなったものである。フクロウ類の耳も物音を聞き取るための能力を高めるためにそうなったものと考えられている。夜間、暗い中で活動し、獲物を捕らえなければならない猛禽[注4]のフクロウ類は、そのために特別に発達した身体の機能をいくつか具えている。

そのひとつは暗くてもよく見える目である。フクロウの網膜には微弱な光をよく感じとる特殊な神経細胞がいっぱいあって、ほんのかすかな星明り程度の光があれば、対象を視覚で捕らえることが可能になっている。

第二には、その微弱な光が全くない状況下でも鋭い聴覚で、獲物の出す音を感知してこれを襲うことが可能である。（　b　）、飛ぶ時に羽音を出さないように、羽毛の構造が特殊に仕組まれている。

この第二の、音だけで獲物を感知するのに鋭い聴覚を具えているのは当然のこととして理解できるが、（　c　）なぜ、左右の耳の構造が、形態的に異なっているのであろう。

これはどうも音源の位置を正確に把握するために役立っているらしい。耳の構造が違うために、左右で音波の捕らえ方も違ってくる。そこで逆算（？）して、音源を指向するとその交点が正確な音源の位置になるというわけである。

実際に、フクロウを全く光を遮断した真っ暗な部屋に入れ、鳴き声だけを頼りに獲物を襲わせる実験をしたら、その音源への誤差はわずかに横に一度、前後に〇・五度、七・七メートルの距離まで可能であったという学者の研究がある。

我々が小さな微妙な音を聞きわけるとき、しばしば「耳を傾けて」

これを聴取しようと試みるものである。この仕種はほとんど無意識におこなわれる自然な動作であるが、これは、耳を傾けることによって、左右の耳に入る音源からの音波の差異を感知し、これから逆算（？）して音源の位置を知ろうとしているわけで、左右同じ形の耳を傾けることによって、③フクロウの耳と同じ機能を発揮させようとしているのである。

また、小首をかしげるのは、思考するために脳の機能を高める働きもあるらしい。それゆえか、ほかの鳥に比べるとちょこまか動かず、悠然と構え、身じろぎもせず、ときに小首を傾けて獲物を探査するフクロウを、思索のシンボルとしてとらえ、これを知恵の神ミネルバの使者と認めたギリシャ神話を④我々は深い共感をもって容認できるのである。

ミネルバはアテネの町の守護神であったので、アテネで発行されたコインの図柄はフクロウであった。⑤余談になるが、このコインは銀の純度の高さでも有名である。

フクロウは耳を傾けなくても済むように、左右の耳が非対称の構造を持つのであるが、それだけではなく、首が自由自在に回るのである。首を回す能力は（注5）トラフズクで水平に二七〇度に及び、これを一瞬のうちに元に戻すことができる。（　　d　　）顔面を時計の針のように回転させる妙技も可能であり、ほとんど真っ逆さまにできる能力の持ち主でもある。もともと、人間のように発達した顔面につく大きな目で（注6）双眼立体視が可能な能力を持つことに加えて、双耳立体聴（？）が可能でもあるので、⑥どんな暗闇でも、獲物を襲うのに苦労しないというわけである。

問題はその獲物がいるかいないかにかかわるわけで、近年、フクロウ類が著しく減少してきているのは、こんな優れた能力が⑦「宝の持ち腐れ」になっている自然の荒廃と、それに伴う獲物の絶対量の不足が、その大きな要因であることに間違いはない。

（柴田敏隆「カラスの早起き、スズメの寝坊」から）

（注1）正中線＝体を左右に分ける中心線
（注2）相称＝形が均等になっていること
（注3）利き腕＝主に使う方の腕
（注4）猛禽＝肉食の鳥類
（注5）トラフズク＝フクロウの一種
（注6）双眼立体視＝二つの目を使ってものを立体に視ること

問一 □ **A・B**に入る語の組み合わせとして適当なものは次のどれか。

ア［**A** 対称　**B** 非対称］
イ［**A** 対称　**B** 対称］
ウ［**A** 非対称　**B** 対称］
エ［**A** 非対称　**B** 非対称］

問二（　**a**　）から（　**d**　）に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア［**a**それならば　**b**また　**c**たとえば　**d**さらには］
イ［**a**たとえば　**b**さらには　**c**それならば　**d**また］
ウ［**a**さらには　**b**たとえば　**c**また　**d**それならば］
エ［**a**また　**b**それならば　**c**さらには　**d**たとえば］

問三 ①耳孔と……異なっている。とあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア それぞれの耳での音波の捕らえ方が変わることで、獲物を感知しやすくなるよう発達したから
イ 悠然と構えて身じろぎをしないフクロウでも、物音がよく聞き取れるようになっているから
ウ フクロウを含めた脊椎動物の正中線は、必ずしも左右対称を示す線ではないから
エ フクロウには利き耳があり、そちら側だけが少しずつ進化していったから

問四 ②余儀無さ、⑤余談の本文中での意味の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア［**②** 途方のなさ　**⑤** 無駄な話　］
イ［**②** 必要性　**⑤** 補足する話　］
ウ［**②** 絶対性　**⑤** おもしろい話］
エ［**②** やむをえなさ　**⑤** 関係ない話　］

問五 ③フクロウの耳と同じ機能を発揮させようとしているとあるが、その説明として最も適当なものはどれか。

ア 思考するための脳の機能をさらに高めようとしている。
イ 微妙な音までもれなく拾うことを心掛けようとしている。
ウ 光を遮断した状態の中で何とか音を聞こうとしている。
エ 音の違いを用いて対象の位置を知ろうとしている。

問六 ④我々は深い共感をもって容認できるとあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア 外観や仕種から、フクロウが思慮深く知恵を持った存在だと考えられるのはもっともだと思われるから

イ 脳の機能が発達しているフクロウは、他の鳥たちよりも人間に近い存在だとみなされるから

ウ ほんのわずかな光があるだけで物を視野に捉(とら)えているフクロウは、すべてを見抜いているように見えるから

エ 真っ暗な中でも獲物を捕らえられるフクロウは、何か神秘的な力を持っていると考えられたから

問七 ⑥どんな暗闇でも、獲物を襲うのに苦労しないとあるが、そのための条件として適当でないものはどれか。

ア フクロウの網膜に特殊な神経細胞がいっぱいあること

イ フクロウの耳が左右非対称であること

ウ フクロウが悠然と構えて身じろぎしないこと

エ フクロウの羽毛の構造が特殊に仕組まれていること

問八 ⑦「宝の持ち腐れ」になっているの説明として適当なものはどれか。

ア フクロウが環境の変化に追い付いていけず、従来の能力が衰えてきてしまっていること

イ 環境が悪化していくことで、フクロウの優れた能力が発揮できなくなってきていること

ウ フクロウの真の能力が明らかになってくるにつれて、思索のシンボルにはふさわしくないことが分かってきたこと

エ 具えている発達した機能を生かしきれずに、フクロウが個体数を著しく減少させてきていること

問九 本文中で述べられている内容として適当なものはどれか。

ア フクロウは、優れた視覚や鋭い聴覚をうまく使って獲物を捕らえている。

イ 動物には正中線があって、どんな動物でも左右対称の身体を持っている。

ウ フクロウの耳は左右非対称の形状をしているが、それはフクロウが猛禽だからである。

エ フクロウは首が自由自在に回ったり顔面を真っ逆さまにできるため、身じろぎをする必要がない。

五

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

野球というものがどれほど広いか、深いか、惨いものか何一つ知らなかった。思い知ったのは、高校二年の夏、地区予選のマウンドで滅多打ちにあった時だ。準決勝でも、決勝でもない。初戦、練習試合では圧勝していた相手チームに、バッティングピッチャーのような打たれ方をした。三回ももたず降板。それが①泥沼の始まりだった。以前から張りと鈍痛のあった肩はなかなか完治せず、焦る真郷を嘲笑うように、季節だけが過ぎていく。

監督から野手への転向を言い渡されたのは、三年になって初めての練習日だった。校庭の桜はまだ満開にもなっていなかった。

「おまえの肩のこと、早く見抜けなかった、おれの責任だ」

監督が苦渋の表情で呟く。

「すまんかったな、真郷」

そうではない。違うでしょう、監督。肩を壊したからマウンドをあきらめろと、それは……違うでしょう。

労りだろうか、哀れみだろうか、責任感だろうか。どれにしても、すまなかったと頭をさげる監督の配慮が苦しかった。②自分の限界は自分が一番、よくわかっている。わかってしまうということは、時に痛覚を刺激する。生身に突き刺さる針だ。深く、容赦なく突き刺さる。生まれて初めて味わう残酷な痛みだ。

おれは、マウンドに立ち続けられるほどのピッチャーではなかったんだ。肩は治っている。だけど投げられない。投げても無残に打たれるだけだ。中学時代とは③けた違いの力と技術を持った打者に通用するだけの球を……投げられない。

それが、おれの実力だ。

自分の限界を自覚することの恐怖と惨めさ。まだ、野球という世界の入口に立っているだけなのに、その底知れなさに圧倒される。

ああ惨めだと、心底思った。こんな惨めさを味わうために、おれは野球にしがみついていたのかと、自己を嘲りたくなる。いっそ、やめてしまうか。自棄の声がした。惨めな思い出ごと野球を棄ててしまえるなら、それが一番、楽じゃないか。

④律がマウンドから投げる姿を見る度に、自棄の声は強くなる。

もういい。棄ててしまえ。

投げられない自分より、律に嫉妬している自分が嫌だった。憎むほどに嫌いだった。うらやみ、嫉妬、嫌悪、焦り……どろりと重い感情だけが溜まっていく。

次の日、休日返上の練習があった。もうやめよう。これ以上野球にしがみつくのは、もうおしまいにしよう。

決めて退部届を忍ばせてグラウンドに来た。練習の始まる前に監督に手渡し、去る。決めていたのだ。

「律？」

何気なく部室を覗いた時、律の背中が見えた。背番号のない練習用のユニフォームが部室の隅でもぞもぞと動いている。真郷の気配に気づき、振り向く。中学時代そのままの気弱な笑みが浮かんだ。

「何しとるんや？」

「うん……ちょっと」
律の手には薄汚れたボールが握られていた。
「なんや、練習球やないか」
「うん」
使い古された練習用のボールは、糸目もわからぬほど汚れ、表皮には無数の傷ができていた。新品の時あれほど鮮やかだった縫い目は色あせ、ほつれ、もとが何色だったのかにわかには判別できない。部の予算は限られている。少しでも節約しようと部員たちは、一球一球ほつれを繕い、表皮を磨き、使い続けていた。それでも使用に耐えないほど傷んでしまったものは、捨てるしかない。律が屈(かが)みこんでいたのは、部員たちが昨日選(え)り分けたばかりの廃棄用ボールを収めた段ボール箱だった。律はその中から、ボールを一つ選び出していたらしい。
「別に、盗もうとかしてたわけやないで……あの……一つぐらいもろうてもええよな？」
わずかに目を伏せて、律が［　　］。悪戯(いたずら)を見つけられた子どもの仕草だった。
「そりゃあ、かまわんやろ。どうせ捨ててしまうボールなんやから。けど、そんなぼろぼろになったのもう使えんやろ。そんなん、持って帰ってどうするんや？」
「一緒に連れて行ったろて思うて」
「どこへ？」〔 Ⅰ 〕
「甲子園」〔 Ⅱ 〕
口がぽかりと開いた。返す言葉が出てこない。律は、⑤耳元まで赤くなりボールをポケットに押し込んだ。
「だって、ほら目標は大きい方がええやないか。おれら、そのために練習してるんやし……ボールがこんなになるまで練習しとるわけやし……何が起こるかわからんのが野球やろ」
「うん、まあ……で、そのボール、持って行くわけか」
「そうや。ぼろぼろになった練習球だって、一つぐらい連れて行ってやらんと、かわいそうやないか」
一息にそう言って、律が目を伏せる。
「おまえ……」
⑥そんなこと考えてたのかと続く言葉をのみ込んだ。伏せた目の端に、意思を秘めた光が宿っていたのだ。どこへと問われ、甲子園と答えた口調に、⑦微塵(みじん)のためらいもなかったではないか。律の視線の先には、あの甲子園がある。〔 Ⅲ 〕
こいつ、ちゃんと捉(とら)えてやがる。夢でも幻でもない。現実の射程内にあの場所を捉えているのだ。知らぬ間に、⑧奥歯を噛(か)み締めていた。
律が顔を上げ、いつも通りの口調で尋ねてきた。
「投げてやろうか？」〔 Ⅳ 〕
「うん？」
「トス、上げてやろうか。バッティングの練習するんやろ」
真郷は大きく一つ息をつく。箱の中に転がる練習球は、どれもみな哀れなほどぼろぼろになっていた。

律に視線を向け、ゆっくりと頷(うなず)く。

「ああ……頼むわ……」

（あさのあつこ「晩夏のプレイボール」から）

問一 ①泥沼とあるが、その内容として最も適当なものはどれか。

ア 甲子園出場は非現実的な夢だと思い知らされ、惨めさにうちひしがれる日々

イ 肩を故障した痛みに耐えながら、不慣れな野手の練習をしなければならない日々

ウ 肩の不調で監督やチームを苦境に追い込んでしまい、責任を痛感する日々

エ 野球での挫折(ざせつ)を味わい、自分自身の醜い感情にも振り回されて悩む日々

問二 ②自分の限界とあるが、その説明として適当なものはどれか。

ア 痛めた肩が完治しても、高校生の強打者を相手に通用する球を投げるだけの投手にはなれないということ

イ 以前から張りと鈍痛のあった肩では、投手から野手へ転向しなければ野球を続けられないということ

ウ 去年、地区予選の初戦で滅多打ちにあってから、投手として監督に信頼されなくなったということ

エ 肩の痛みを隠して試合で投げ続けていたが、監督の目はそれ以上ごまかせなくなったということ

問三 ③けた違いの、⑦微塵の本文中での意味の組み合わせとして最も適当なものはどれか。

ア [③ 段違いの　⑦ 極めてまれな]

イ [③ かけ離れた　⑦ ごくわずかな]

ウ [③ 異なる　⑦ とても細かい]

エ [③ 比較できない　⑦ それほど多くの]

問四 ④律がマウンドから……強くなる。とあるが、その理由として適当なものはどれか。

ア 限界に直面し惨めさを感じる自分とは対照的に、前向きに練習に取り組む「律」をうらやましく思ったから

イ 投手から野手への転向を迫られた自分の焦りや屈辱感を、「律」が理解してくれないから

ウ 本気で甲子園に行こうとする「律」に、嫉妬している自分自身が嫌だったから

エ 野球の底知れなさを知らぬままマウンドを任され、「律」が浮かれているから

問五 □に入る語句として、適当なものは次のどれか。

ア 肩を持つ

イ 肩を貸す

ウ 肩を並べる

エ 肩をすくめる

問六 次の一文が入るところは、本文中の〔 Ⅰ 〕から〔 Ⅳ 〕のどこか。適当なものを後から選べ。

> 光を弾く銀傘が、踏みしめる土が、真夏の青空が、蔦の青葉に埋まる外壁が、確かにある。

ア 〔 Ⅰ 〕 **イ** 〔 Ⅱ 〕 **ウ** 〔 Ⅲ 〕 **エ** 〔 Ⅳ 〕

問七 ⑤耳元まで赤くなり……押し込んだ。とあるが、その時の「律」の気持ちの説明として最も適当なものはどれか。

ア 甲子園出場の夢のためにぼろぼろになった練習球は捨てられないという思いで胸がいっぱいになっている。

イ 甲子園出場という大それた夢を口にしてしまい、照れくさくなっている。

ウ だれにも言わずに甲子園へ練習球を持って行こうと考えていたが、「真郷」に気づかれてしまい焦っている。

エ 「真郷」には甲子園出場の意気込みが全く見られないことに怒りを感じている。

問八 ⑥そんなことの指し示す内容として最も適当なものはどれか。

ア 部員たちが一球一球ほつれを繕い、表皮を磨いて使い続けた練習球を、ただのゴミとして処分したくないということ

イ 厳しい練習に共に耐えてぼろぼろになった練習球を、自分たちと一緒に甲子園に連れて行くこと

ウ 廃棄用ボールを収めた段ボール箱の中から、まだ使える練習球をこっそりもらって帰ろうとしていること

エ 部員たちが大切にしてきた練習球を「真郷」に見せれば、甲子園出場を理解してくれるはずだと期待すること

問九 ⑧奥歯を噛み締めていた。とあるが、その時の「真郷」の気持ちの説明として適当でないものはどれか。

ア 本気で甲子園を目指すひたむきな「律」に比べ、泥沼から抜け出せず自棄になっていた自分が恥ずかしくなっている。

イ 思いもよらない「律」の強い意思が伝わり、野球をあきらめかけていた自分をふがいなく感じている。

ウ 現実の射程内に甲子園を捉えて励んでいる「律」には、迷いや弱さに苦しむ自分は到底勝てないのだと実感している。

エ 「律」の甲子園に対する一途な思いに触れ、迷いだけに振り回されていた自分の未熟さを痛感している。